パリのパレ・ロワイヤルとその劇場の変遷について¹⁾

18・19世紀フランスにおける劇場と都市計画に関する研究 その1

THE PALAIS ROYAL IN PARIS AND ITS THEATRES

Theatrical architecture and town planning
in the 18th and 19th centuries (Part 1)

元岡展久*

Nobuhisa MOTOOKA

The Palais Royal has played a central role in the history of theatres in France. It also had an important influence on the town-planning of Paris. In this research I analyse the relationship between the theatres which were built in the Palais Royal and the development of the surrounding area. From the examination of various plans, the different forms of theatres in their built form can be explained in terms of different ideas concerning urban structure. By charting these differences we can see a process of shift from a court theatre to a urban public theatre, which in turn changed the surrounding urban spaces. This analysis thus provides a new understanding of the relationship between theatres and the urban spaces that contain them.

Keywords: Paris, town planning in the 18th century, theatre, Palais Royal, Victor Louis, Comédie-Francaise

パリ、18世紀都市計画、劇場、パレ・ロワイヤル、ヴィクトル・ルイ、コメディ・フランセーズ

序

本研究は、18世紀後半フランスの主要都市に建設された劇場を対象とし、その配置及び形態を分析したものである。さらに近代劇場の端緒とされるこれらのフランス公共劇場の分析を通じて、18世紀後半以降、公共建築物を要として公共空間を創出する都市開発の過程と、その意義の明証を試みるものとする。そして本稿は、この研究の一端として、建築家ヴィクトル・ルイ²⁾によって再開発されたパリのパレ・ロワイヤル³⁾及びその敷地の一隅に建設されたテアトロ・ヴァリエテ・アミューザントの劇場（現在コメディ・フランセーズが本拠地とする劇場）⁴⁾を分析したものの、第一部である。

18世紀後半フランスに建設された劇場は、汎ヨーロッパ的に広がっていたイタリアのバロック宮廷劇場から発展したものと捉えられるが、同時に、新たな公共劇場の先駆として位置付けられる。すなわち、近代公共劇場の端緒としての先進性は、王侯貴族だけでなく大衆にも開かれた劇場という点のみならず、都市開発と連携して劇場が建設されたという点にある。病院、美術館、図書館といった公共の施設は、いずれも18世紀後半以降独立して都市に建設されるようになっていくが、とりわけ劇場は、民衆の熱気を反映したものであったことから、こうした公共施設の独立化という動きを典型的に示す

建築の類型であった。実際、文字の上ではヴォルテールが1750年以前から既に繰り返し都市の美化とそれに照応した壮大な劇場の建設を提言しており⁵⁾、これが18世紀の後半になって漸く具現化しはじめたのである。さらに当時の多数の建築家にとって、都市の公共劇場は——その都市開発を含む建設の規模、注目の度合、市民社会に対応する機能であるという社会性、といった理由より——極めて大きな関心を引き付ける建築物となっていたのである。18世紀フランスの劇場と都市の美化に関する論文を著したダニエル・ラブローは以下のように述べる：「劇場に対する熱意は、(...) 絶えずふくれあがってゆく精神的・社会的な要素となっただけでなく、より都会化された意識をもって、人々の集う娯楽の場所が、(...) 生き生きとした表現で特徴づけられるような理性的な都市整備を産みだそうとしていた⁶⁾」。

一方パレ・ロワイヤルに建設された劇場には1781年までオペラ座が、1799年からコメディ・フランセーズが拠点としてきたように、その変遷は近代フランス劇場史の主幹をなす。同時に、18世紀後半から19世紀を通じてパレ・ロワイヤルは「パリの首都」と呼ばれたように⁷⁾パリで最も賑わう商業、文化の中心地であり、かつパリの都市計画の要となった場所でもあった。こうした点からパレ・ロワイヤルの変遷は、18世紀都市劇場の誕生と、それに関連した周辺都

* 香山壽夫建築研究所 博士(工学)

Kohyama Atelier (Kohyama and Associates), Dr. Eng.

図1 パレ・ロワイヤル周辺地図(1778頃)

図2 パレ・ロワイヤル周辺地図(1791頃)

図3 パレ・ロワイヤル周辺地図(20世紀初頭)

■は劇場の配置を示す。記号A: パレ・ロワイヤルの庭園(Jardin du Palais Royal) B, B': オヌール中庭(Cour d'Honneur) C: プランス庭園(Jardin des Princes) D, D': フォンテーヌ中庭(Cour des Fontaines) E: ロルロー中庭(Cour de l'Horloge) F: サントノレ通り(Rue St. Honoré) G, G': パレ・ロワイヤル広場(Place du Palais Royal) H: リシュリュー通り(Rue de Richelieu) I: プティ・シャン通り(Rue des Petits Champs) J: ボン・ザンファン通り(Rue des Bons Enfants) K: シャトー・ドオ(Château d'Eau) L: 図書館(Bibliothèque du Roi, 後にBibliothèque Nationale) M: ギャラリー・アン・ボワ(Galerie en bois) N: モンパンシエ通り(Rue de Montpensier) O: ボジョレ通り(Rue de Beaujolais) P: ヴァロワ通り(Rue de Valois) Q: サークス劇場(Le Cirque) R: ギャラリー・ドルレアン(Galerie d'Orléans) S: テアトロ・フランセ広場(Place du Théâtre Français) T: ヴァロワ広場(Place de Valois) U: オペラ座大通り(Avenue de l'Opéra) V: リヴォリ通り(Rue de Rivoli) W: カルゼル広場(Place du Carrousel)

市空間の具体的な変化に関する重要な事例となるのである。

そこで本稿では、まず、17世紀からパレ・ロワイヤルに建設されてきた劇場について、その配置の変遷を明らかにし、それらの劇場と周辺の都市空間との関連を論じるものとする。なお、引き続き次稿において、この変遷の中で、特に重要な転機と見なすルイのパレ・ロワイヤル再開発と劇場建設に注目した分析をおこなう予定である。本研究に関連する資料及び既往研究は多岐にわたり、大別すれば、パレ・ロワイヤルについて、18世紀フランスの劇場について、都市計画に関して、そして劇場を設計した建築家のモノグラフ等が列挙される⁸⁾。本稿はこうした資料と研究成果を踏まえた上で、残されたパレ・ロワイヤルの図面資料をもとに⁹⁾、都市的観点からパレ・ロワイヤル再開発と劇場建設の位置付けを新たに検討するものとする。

1. パレ・ロワイヤルの劇場の沿革

元来パレ・ロワイヤルは、ルイ13世の宰相の地位にあったリシュリューが、ルーヴル宮の北側に近接した場所に、庭園をもつ宮殿として1634-1642年に建設したものである。建築家はジャック・ルメルシエ (LEMERCIER, Jacques, 1585-1654)であった。その過程で、宮殿内の南東の一部に1641年に完成された私設の劇場が、パレ・ロワイヤルの劇場の起源となっている。それ以降、数度の崩壊と再建の繰り返しなかで、大きくいえば現在まで、パレ・ロワイヤルには三つの劇場建築物¹⁰⁾が歴史を重ねてきた。

まず1641年に完成された枢機卿宮劇場 (Théâtre du Palais Cardinal)はそもそもリシュリューの私設劇場であった(以下「枢機卿宮劇場」と記す)¹¹⁾。建設以来この劇場は何度と改修を受けたが、そうした中で大衆にむけた玄関が開かれるのは、1661年にモリエール座がこ

の劇場を改修し活動の拠点とした時以降のことである¹²⁾。モリエールの死後、宮廷作曲家であったリュリはモリエール座を当劇場から追い出し、1673年この建築に手を加えると共に自らが実権を握る王立音楽院 (L'Académie Royale de Musique以下「オペラ座」と記す)を据えた。この劇場の狭く使いづらい状況にも拘らず¹³⁾、オペラ座は1763年の火災¹⁴⁾による崩壊までこの枢機卿宮劇場を使用する。一方、劇場が崩壊する以前から、既に宮殿も何度と修築が繰り返されておられ、特に18世紀半ば以降に手を加えられた部分は、現在でも一部にその姿を留めている¹⁵⁾。これらの一連の改修の半ば、1763年に枢機卿宮劇場が火災で崩壊し、その後、ピエール＝ルイ・モロー¹⁶⁾によってオペラ座の新劇場(以下「モローのオペラ劇場」と記す)が1770年に再建された¹⁷⁾。公共のオペラ劇場であることから、建設・運営費は共にパリ市が負担することになった¹⁸⁾。一方で規模を拡大されたとはいえ、以前の劇場とほぼ同じ場所である宮殿の一部に劇場が建設されたのは(図5と図7を比較のこと)、宮殿の所有者であったオルレアン公の強い意図によるといわれている¹⁹⁾。このモローのオペラ劇場は、11年半という短命で、1781年に再び火災で崩壊する²⁰⁾。時は前後するが、この火災以前にシャルトル公²¹⁾は父のオルレアン公からの相続によってこの宮殿を取得し、不動産収入を目論んで、ヴィクトル・ルイに庭園の周囲を囲む都市住宅及び商業施設の建設を依頼していた。モローのオペラ劇場の火災は、ルイの設計の途中にして起こった惨事であり、そこでこの期に劇場を含めた一連の宮殿、住宅、庭園の再開発をルイが手掛けることになったのである²²⁾。当初シャルトル公は、かつて宮殿内にオペラ座を有していた時のように、再建した劇場にオペラ座を呼びいれようと策したが、オペラ座は既にパレ・ロワイヤルから離れた別の場所に劇場を建設し公演をおこなっていた²³⁾。従ってルイによって1790年に完成された劇場には、テアトロ・デ・ヴァリエテ・アミューザントが、そして

図4 パレ・ロワイヤル平面図
(1679)

図5 宮殿平面図、立面図、及び
立面図部分拡大（袋小路入口部分）

図6 枢機卿宮劇場平面図

図7 モローによる宮殿改修案及び
オペラ劇場計画面

図8 モローのオペラ劇場平面図
(1階、2階平面図)

図9 モローのオペラ劇場立面図

1799年以降は、革命期に分裂していたコメディ・フランセーズ座が再統合し拠点を構えることになったという次第である。

18世紀末にフランスで活躍した建築家の中でも、ヴィクトル・ルイは、ボルドーの劇場を代表作として、劇場を多く手掛けた²⁴⁾一人である。そのうえ彼はパレ・ロワイヤルにおいて劇場を設計だけでなく、庭園を含む宮殿全体の再開発を手掛けている²⁵⁾。つまり、ルイは庭園部分に庭園を囲いこむ都市住宅を建設し、その内側にサーカス劇場²⁶⁾を設置、宮殿部分も大きく改修するなど、現在でも見られる姿の大部分を築いたのである。こうして、パレ・ロワイヤルの基本的な建築物はルイによる修築終了時にほぼ現在の姿を持つようになった。

しかし、特にパレ・ロワイヤル周囲の都市空間に関していえば、その後も更に多くの開発と整備が繰り返された。次の章では、これら19世紀以降の改修も含めて、17世紀よりパレ・ロワイヤルに順次建設された各々の劇場配置の特徴を検討する。

2. パレ・ロワイヤルにおける劇場の配置（都市との関連からみた個別事例の特徴）

2.1. 枢機卿宮劇場²⁷⁾ (1641-1763) (図4) (図5) (図6)

この劇場の都市的観点からみた特徴は、以下の点に集約することができる。まず第一に劇場は、宮殿のサントノレ通りに面した部分に位置するも、その通りから直接入るアクセスは設けられていない。観客は小さな袋小路に入った後、劇場の側面からアクセスする。この入口は、モリエール座がこの劇場を使用する際に設けられたものであり、それ以前は宮殿の内部からしか劇場に入られなかった。次に、劇場は、完全にパレ・ロワイヤルの宮殿内に含まれており、独自のファサードは持たない。劇場は宮殿内の一つの部屋といってもよく、外部のサントノレ通りから劇場空間の存在を知ることは不可

能である。立面に見られる窓は内部の劇場の階高とは全く無関係の位置に設けられた²⁸⁾。一方で立面図(図5)より、劇場の入口につながる袋小路の進入口に、特異な要素が設けられていることが分かる。これは、邸内に隠れた劇場の存在を外部に現すものであったといえるが、劇場本体からは完全に独立していた。

2.2. モローのオペラ劇場²⁹⁾ (1770-1781)

(図1) (図7) (図8) (図9)

まずモローのオペラ劇場は以前の枢機卿宮劇場とほぼ同位置に位置している。サントノレ通りに面する劇場独自のファサードが設けられ、劇場へは通りから直接アクセスが可能となっており、この点で枢機卿宮劇場と比較すれば、より公共に開かれている。劇場の東側面は、隣接する建築物に接しているが、一階ではフォンテーヌ中庭へ導かれる通路によって、東側建築物から分けられていた。さらに、リヨンの劇場において設けられたフランス初の公共のホワイエが、この劇場にも前面の通りに面する部分、すなわち街を見る場所かつ街から見られる場所に、バルコニー付きで設置された(図8)。この空間に対する高い評価は³⁰⁾、ホワイエが劇場に必須の空間として一般化していく契機をもたらした。

この劇場を設計したモローは、パリ市の主任建築家であった立場から、啓蒙期のパリの都市美化計画に大きな足跡を残している³¹⁾。パレ・ロワイヤル広場の美化計画、及び広場に面する宮殿ファサードも彼の手によるものであるが、明らかに広場は宮殿に対応して計画されており、劇場は宮殿の脇役でしかない。つまり、劇場のファサードは劇場独自のものであるとはいえ、宮殿のそれとの比較でいえば、慎ましやかなものであった(図9)。さらに配置に関しても、規模は大きくなったとはいえ相変わらず劇場は宮殿の一部に属している。当時、公共広場に面した劇場建築の例はまだ少ないながら、リ

図10 ルイによる宮殿及び
劇場計画案平面図

図11 ルイによる劇場計画案平面図

図12 リシュリュー通りから見た
コメディ・フランセーズ劇場(18世紀末)

図13 フォンテーヌによる宮殿及び
劇場の改修の平面図

図14 ペルシエとフォンテーヌによる
ルーヴル宮周辺の都市計画

図15 シャブロールによる増築以降のコメディ・
フランセーズ劇場外観写真
(左側が西側面、右側が南正面)

ヨン³²⁾、モンペリエ³³⁾、メッス³⁴⁾といったフランスの先駆的な都市劇場が既に完成されていたし、またモローによる建設に先立って提案された他の建築家によるオペラ劇場再建案は、パレ・ロワイヤル内ではなくより公共の場所に提案されていた³⁵⁾にも拘らずである。したがってこの劇場は、細かな点で旧劇場と比較した際、公共劇場としての特徴をより有していたとはいえ、概して言えば、特に配置上からみると決して先進的な都市劇場とはいえない。モローのオペラ劇場は、後のオデオン座³⁶⁾のように周辺地区の核として位置付けられたものとは、明らかに配置上異なる性格を有しており、いわば、未だ都市計画の中に組み込まれていなかったのである。

2.3 ヴィクトル・ルイによるコメディ・フランセーズ劇場³⁷⁾ (1791-) (図2) (図10) (図11) (図12)

ルイは劇場の建設のみならずパレ・ロワイヤル全体の再開発を手掛けているが、本稿では、劇場配置の比較に主眼を置き、したがってルイによる劇場の、配置上の特徴を主に検証する。

劇場は、宮殿の南西部、元々プリンス庭園のあった部分の南側に位置している(図2)。劇場の南面は隣接する建築物に隠され、東面は宮殿と接しているため、独立したファサードは、西と北の二面のみである。したがって、劇場は未だ宮殿の一部に属するともいえるが、一方で、劇場一階部分の四周の回廊は、劇場後部で庭園を囲む回廊に連結されており、劇場の機能が宮殿の一部というより、むしろ庭園に開発された都市複合施設の一環として計画されたことを物語っている(図10)。同時にこの回廊は劇場の周囲を巡り、他の建築から劇場を分離しているといえなくはない。この回廊によって劇場は東を除く三面からのアクセスが可能となり³⁸⁾(図11)、その内、西側のリシュリュー通り側が劇場の正面とされた。劇場の意匠は、パレ・ロワイヤルの他の部分のそれと截然と区別される。また通常劇場は

機能的な要請から高いヴォリュームの建築物となるが、この特徴が逆ギール状屋根³⁹⁾で強調され、劇場であることが際立てられた意匠を読み取ることができる(図12)。よってリシュリュー通りから見た場合、劇場は宮殿の一部として認識されず、むしろ独立した劇場建築物としての印象を強く受けるのである。しかし、既に広場に面した都市劇場がフランスの諸都市で一般化する時期に、しかもこうした都市劇場のモデルともいえるボルドーの劇場をルイ自らが建設していたにも拘らず、その流れに逆行するかのように、ルイはこの劇場を広場に面して計画しなかった⁴⁰⁾。現状のように広場に面した劇場となるのは、劇場建設後、半世紀以上も後のオースマンのバリ大改造まで待たねばならないのである(図3)。

2.4 コメディ・フランセーズ劇場の改修⁴¹⁾ (ルイ以降) (図3) (図13) (図14) (図15)

ルイによる再開発以降のパレ・ロワイヤルの変遷は、当建築家には直接関連しない。しかしコメディ・フランセーズ劇場の建設が、都市計画上の一転機であり、それ以降の周囲の都市開発に極めて甚大な影響を与えたという点を確認するためにも、建設後の変遷を看過するわけにはいかない。

まず検討すべき改修は、1814年から1831年にかけて行われたフォンテーヌ⁴²⁾によるものである(図13)。フォンテーヌは宮殿正面のファサードの西側部分に、オヌール中庭へ直接アクセスすることのできるギャルリイ・ド・ヌムール(Galerie de Nemours)を設け、宮殿を西側に隣接する民間の建築物から独立させた。この事は同時に、宮殿ファサードの左右対称性を際立たせている。さらに、革命の間に廃墟のように荒廃した庭園南面のギャルリイ・アン・ボワ(Galerie en bois)をギャルリイ・ドルレアン(Galerie d'Orléans)として整備した(1828年)。図(図13)にも明らかなように、この改修によって、劇場は、

ルイの時期と比較してより宮殿からの独立性を強めている。実際パレ・ロワイヤルにおいて彼の手によって改修されたのはその一部にすぎなかったが、彼の計画が単なる改修に留まるものでないことは、彼がナポレオン治世下で手掛けたパリの都市計画に顕著に現れている。彼の著書⁴³⁾に掲載された「テュイルリー宮、ルーヴル宮、パレ・ロワイヤルの再開発計画」(図14)に描かれているとおり、彼はベルシエと共に、三つの宮殿を一体化し周辺地区を整備するという壮大な構想を練った。テュイルリー庭園北側を通過してパレ・ロワイヤル広場に繋がるリヴォリ通りの建設は、この計画の一部である。この再開発計画案においても劇場は要をなし、拡大されたパレ・ロワイヤル広場には回廊が巡らされたオペラ座の劇場が、さらにコメディ・フランセーズ劇場西側前には半円形の広場が、劇場北側には矩形的の広場が立案されている。彼らが描いたこのような壮大な都市計画は、形をかえつつオースマンのパリ大改造に受け継がれていくことになる。

その後のオースマンのパリ大改造に伴うより大きな都市的文脈の中で為された開発行為に関しては、ここではコメディ・フランセーズ劇場に関連した開発についてのみ略述する(図3)。まずオースマンの計画に沿って1853年より劇場の西側にテアトロ・フランセ広場(Place du Théâtre-Français、現在、Place André Malraux)の建設が始められた。後にこの広場はオペラ座大通りの開通によってオペラ座広場⁴⁴⁾と繋げられることになる。更に劇場南側の広場(現在、Place Colette)の整備に伴い、建築家ピエール＝プロスペル・シャブロール(CHABROL, Pierre-Prosper, 1812-1875)によって、それまで他の建物に隠されていた劇場南面が劇場正面として増築され、新たな入口、ホワイエ、大階段が設置された⁴⁵⁾。ここで漸く現在の劇場の外観が完成し(図15)、東面を除く三つの立面が独立した上、その内、西面と南面が広場に面することになる。外観の意匠についていえば、この改修でシャブロールは、ルイによる西、北側のファサードを保存しつつ、使用された要素を繰り返し南面にまで準用している。正面を南にすることは、ルイの意図していたことではないにも拘らず、南面を要素のみの援用をもって正面にしたため、劇場の正面が曖昧なものとなってしまった。またルイは劇場を回廊で取り囲むことで東を除く三面からのアクセスを可能とされていたが、現在では、劇場周囲を回廊が取り囲むものの、主入口は南面のみとなっている。

3.都市的視点から見たパレ・ロワイヤルの劇場の変遷

一般に西洋劇場史では、18世紀半ばを境にそれ以前は宮廷内に劇場空間が設けられていたが、それ以降は都市空間に独立した劇場が多数建設されるようになってきたとされる⁴⁶⁾。しかし実際劇場に現れた変化は、この説明ほど、単純ではなかった。つまり、これまで検討してきたパレ・ロワイヤルの劇場の長期間におよぶ改築改修の変遷にも明らかのように、宮殿の中に設けられていた演劇空間が、都市空間に独立した劇場として建設されていく過程に、過渡的な段階が存在するのである。つまり、より具体的にいえば、劇場の配置にみられた特徴を以下の四つの段階に分けることができる。

第一段階 宮殿内の一部に設けられた劇場(枢機卿宮劇場)。劇場は完全に宮殿内部に位置し、外部の都市空間から内部の劇場の存在を知ることはできない。

第二段階 ファサードのみが都市空間に面している劇場(モローのオペラ劇場)。劇場は宮殿に併設されているが、ファサードは劇場独自のものを有す。前面通りより直接劇場へ入ることができ、外の都市から劇場内のホワイエや玄関を見ることができる。

第三段階 機能上かつ配置上独立した劇場(ヴィクトル・ルイによるコメディ・フランセーズ劇場)。宮殿から独立して建設され(パレ・ロワイヤルの敷地内であるが)宮殿とは全く別の通りに面して入口を持つ。

第四段階 機能上配置上独立した劇場で、かつ広場に面する劇場(シャブロールによる改修後のコメディ・フランセーズ劇場)。第三段階の劇場のように独立し、かつ周囲地域の核となるよう広場に面している。

このようにパレ・ロワイヤルは、宮廷内の劇場から都市の劇場へと徐々に変化する過程を、一つの建築物の変遷の中で段階的にたどっていきける⁴⁷⁾希少かつ貴重な例なのである。

こうした変遷の捉え方からみれば、劇場が都市計画的な意義の中に組み込まれて建設されたのは第三、及び第四段階であった。したがって、モローのオペラ劇場(第二段階)と、ルイのコメディ・フランセーズ劇場(第三段階)の間に、都市的意義の相違をみるのは至当である。つまり、モローのオペラ座が宮殿に併設され都市計画の中に組み込まれていなかったこととの比較でいえば、同じくパレ・ロワイヤルの敷地内ではあったといえ、ルイのコメディ・フランセーズ劇場はむしろパレ・ロワイヤルの庭園内の都市施設と周辺の都市空間とを結び付ける部分に位置しているのである。ルイの劇場は、パレ・ロワイヤルの一部でありながら、同時に都市の一部であり、パレ・ロワイヤルの施設を積極的に都市に開き、都市と結び付けていく役割を担っていた⁴⁸⁾。この点からも、ルイの劇場は都市の中に組み込まれていたといえる。さらにこの両者の劇場を比較した際、その建設時期は約20年ほどの差でしかないことに留意すべきである。この間に、もちろん、フランス革命が始まっている。より、劇場に直接的な事項をあげれば、この20年間にボルドーの劇場(1780)、パリのオデオン座(1782)、ブザンソンの劇場(1784)⁴⁹⁾が完成し、さらにデュモンの劇場図集やショモンのオペラ劇場計画案等に引き続き、ピエール・パットの劇場理論⁵⁰⁾によって都市劇場は頻繁に議論の俎上に載せられた。つまり、モローが劇場を建設した当時、都市劇場は未だリヨンの劇場等の少数の先駆的な例でしか実現されていない揺籃期にあったにすぎなかったのだが、その後の20年間で漸く多くの都市で建設されるようになり、また議論も繰り返し為され、都市劇場の姿が十分一般的になってきたと考えられる。だが確かに、ルイの劇場は広場に面しておらず、かつ完全に四面が独立していたわけではない。この点に関しては、施主であったシャルトル公の意図など特殊な事情を含めた考察が必要である。いずれにせよ、その後、約50年以上の歳月をかけて劇場を中心に周囲が徐々に整備されていくことを考えれば、当初広場に面しておらずとも、ルイの劇場には都市劇場としての形質が十分に潜在していたといえる。

以上に見た劇場自身の変遷と同時に、劇場の周辺地区の変化にも注意を傾ける必要がある。つまり、パレ・ロワイヤルを含む周辺地区の美化事業は――モローが宮殿前広場を整備してから、一世紀以上にわたって断続的に続けられたが――、大きな社会的、経済的、

文化的変化を伴うものであり、その過程で劇場は中心的役割を担っていたことを、パレ・ロワイヤルの周辺の都市空間の変化から読み取ることができる。劇場建設に伴う周辺地区の美化、商業施設の充実、人の集中など、劇場が都市へ与えた影響は、極めて甚大なもので、特にルイの劇場完成後には、街区構成までも、劇場を核とするよう（劇場の配置に呼応して）開発されたのである。

結

パレ・ロワイヤルに建設された劇場の変遷、及びヴィクトル・ルイによるパレ・ロワイヤル再開発計画の検討から以下のことが明らかにされた。

パレ・ロワイヤルに存在した劇場では、その建設と崩壊のたびに配置、都市との関係が変化し、さらにその配置の変遷過程には、延内に設置された劇場から都市空間に開かれた劇場への段階的な変化をたどることができた。つまり具体的な検討の結果、パレ・ロワイヤルにおける劇場の配置の変遷は、大きく四段階に分けられた。最初、劇場は完全に宮殿内に建設されていたが、最終的にルイのコメディ・フランセーズ劇場で地域の核として周囲の都市空間を包容させていく役割を担うようになるのである。

このパレ・ロワイヤルの劇場の変遷を通じてみると、ルイによる劇場の建設は、都市開発の観点から極めて大きな転機をなすものであったことが理解できる。それは、劇場の変遷において宮殿内の劇場が都市の劇場へと姿を変えたことのみならず、パレ・ロワイヤルの敷地を劇場の建設によって都市空間へと開いたこと、さらに当劇場の建設後、劇場を核として周辺が開発されたことに大きな意義が認められる。

最後に、ルイによる劇場の建設は、ルイが手掛けたパレ・ロワイヤルの再開発の一部であったことを忘れてはならない。そこでルイによるパレ・ロワイヤル全体の（劇場を含めた）再開発計画の変遷、及びその都市的な意図については、次稿において詳細に検討する。

注

凡例

注における太文字は図面等の表題を示す。その内引用符付きのものは図面に書かれた表題、引用符のないものは図書館等の目録に記された表題を示す。図面の大きさはmmで表示する。

A.N.: パリ古文書館(Archives Nationales). Anon.: 著作者不明(anonyme).
B.C.F.: コメディ・フランセーズ図書館(Bibliothèque de la Comédie-Française).
B.H.V.P.: パリ市立歴史図書館(Bibliothèque Historique de la Ville de Paris).
B.N.: パリ国立図書館(Bibliothèque Nationale). B.N.Est.: パリ国立図書館版画室(Bibliothèque Nationale, cabinet des Estampes). Cat. exp.: 展覧会カタログ(catalogue d'exposition). cit.: 引用(cited by, cited in). fle. (fles.): 枚(feuille (feuilles)). M.C.: パリのカルナヴァレ美術館(Musée Carnavalet)

- 1) 本稿はパリ第一大学Université de Paris-I, U.F.R., Histoire de l'art et archéologieに1997年10月提出したDE.A論文の一部に、その後の知見を加え修正・加筆したものである。また、本論文は「文部省科学研究費補助金による研究成果(又はその一部)」である。
- 2) LOUIS, Louis-Nicolas, 通称 LOUIS, Victor. 1731-1800. 本稿においては「ヴィクトル・ルイ」、又は「ルイ」と称する。
- 3) Palais Royal. 元来この建物は、リシュリユー枢機卿宮(Palais Cardinal)であり王宮ではなかった。リシュリユーの死後、ルイ13世に寄贈され、1643-52年にはルイ14世が住みパレ・ロワイヤルとなる。ルイ14世がヴェルサイユに移った後、当宮殿はオルレアン家の所有となる。本稿では年代に関係なく「パレ・ロワイヤル」の名称を使用する。また本稿中「パレ・ロワイヤル」の呼称は、その敷地全体又は敷地内の建物全体を指し、特にその

内の一部を示す時は「(パレ・ロワイヤルの)宮殿」「(パレ・ロワイヤルの)庭園」といった名称を用いて区別する。

- 4) まずこの劇場は計画時にはオペラ座の劇場として構想されたものである。完成時にはThéâtre des Variétés amusantes が使用することとなった。この劇団が、使用した後、Théâtre-Françaisが使用し、Théâtre de la Liberté et de l'Egalitéまたは、Théâtre de la républiqueと呼ばれた後、革命期に分裂していたLa Comédie-Françaiseが1799年にこの劇場を本拠地として統合された。本論では年代に関係なくルイによる当劇場建築物を「コメディ・フランセーズ劇場」と記す。see, infra. note 10.
- 5) VOLTAIRE, *Embellissement de Paris*, 1749. 及び, *Sémiramis*, 1748.の序文"Disertation sur la tragédie"を参照のこと。VOLTAIRE, *Œuvre complètes de Voltaire*, Paris, Lefèvre et Deterville, 1818.
- 6) STEINHAUSER, M., and RABREAU, D., "Le théâtre de l'Odéon de Charles De Wailly et Marie-Joseph Peyre, 1767-1782", *Revue de l'art*, no.16, 1973, p.9.
- 7) 劇場のみならず、サーカス、レストラン、カフェ、客店等の施設、店舗が一階ギャラリーに並び、上階には住居が設けられた。パレ・ロワイヤルがパリの商業、文化の中心であったことは、ルモワンが彼の著書の中で引用している以下の18世紀の言葉の中に端的に顯れている。「パリがフランスの首都なら、パレ・ロワイヤルはパリの首都である」LEMOINE, B., *Les passages couverts*, Paris, s.d. (1990?), p. 36.
- 8) まず、パレ・ロワイヤルの研究に関して必須の既往研究は、CHAMPIER, Victor, and SANDOZ, G.-Roger, *Le Palais Royal, d'après des documents inédits, 1629-1900*, Paris, 1900, 2 vols. (New edition SIGURET, Philippe (ed.), Paris, 1991, 1 vol.ただし本稿での引用ページは新版のもの)また19世紀初頭に著された、PERCIER, Charles, and FONTAINE, Pierre-François-Léonard, *Plans de plusieurs châteaux, palais et Résidences des Souverains de France, d'Italie, d'Espagne et de Russie*, Paris, 1833, 2 vols. は、パレ・ロワイヤルの、特に建築の変遷に関する研究に於いて最初に紐解くべき資料となっている(フォンテーヌに関してはinfra, note 42 and note 43)。劇場に関する当時の書物は、PATTE, Pierre, *Essai sur l'architecture théâtrale*, Paris, 1782.. DUMONT, Gabriel-Pierre-Martin, *Recueil de plusieurs parties de l'architecture sacrée et profane de différents maîtres tant d'Italie que de France*, Paris, s.d.(1764-67). DONNET, Alexis, *Architectonographie des Théâtres de Paris, ou Parallèle historique et critique de ces édifices considérés sous le rapport de l'architecture et de la décoration*, Paris, 1821.が重要である。18世紀の劇場に関しては、オートクルの著名な『フランス古典主義建築の歴史』の一部に劇場の記述が為されている。HAUTECOEUR, Louis, *Histoire de l'Architecture classique en France*, t. III, Paris, 1950. and t.IV, Paris, 1952. 都市美化の観点から劇場を研究した論文としてRABREAU, Daniel, *Le théâtre et l'embellissement des villes de France au XVIII^e siècle*, Thèse de l'Université de Paris IV, 1978.が先駆的かつ全体的な論文で、重要である。また18世紀の都市計画に関する研究は、ここでは、特に絵画、図面資料に基づく研究として、MOËL, Michel Le, et al., *L'urbanisme Parisien au Siècle des Lumières*, Paris, 1997.を最近出版された興味深いものとしてあげておく。ヴィクトル・ルイのモノグラフは、主に現在まで四人の学者によって為されており古いものよりL'HARDY, Gaullieur, *Portefeuille de V. LOUIS. -Portefeuille ichnographique de Victor Louis-*, Paris, 1828. MARIONNEAU, Charles, *Victor Louis, architecte du théâtre de Bordeaux. Sa vie, ses travaux, et sa correspondance, 1731-1800*, Bordeaux, 1881. PARISET, François-Georges, "Dessins inédits de l'architecte Victor Louis. Notes sur un neoclassicisme ambigu", *Neoclassicismo*, Genova, 1973. 同著者, *Victor Louis, 1731-1800, dessins et gravures*, Bordeaux, 1980. TAILLARD, Christian, *Victor Louis, 1731-1800*, Thèse de l'Université de Paris IV, 1991.
- 9) それぞれの計画案の典拠となる図面のデータは、本論にとって重要な事項であるが本文に掲載する余裕がない。繁雑になるが全て注に記載する。またその図面の作成時期の同定は特にCHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, 及びCat. exp., *Le Palais Royal*, Paris, 1988 (Cat. exp., M.C., Paris, 1988).を参照とした。さらに必要に応じフォンテーヌによって描かれた復元図面(in, PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.F.L., *op.cit.*, supra note 8), 及び18・19世紀に描かれた図面を補足する。
- 10) これら三つの劇場には1781年までオペラ座が、1799年からコメディ・フランセーズが拠点とし、その変遷は、パリ近代劇場史の主幹をなす。また主たる三つの劇場以外にもパレ・ロワイヤルの北端部にルイによって、現在一般に「パレ・ロワイヤルの劇場(Théâtre du Palais Royal)」と称されるThéâtre de Beaujolaisが建設(1784年)された。よって文献等で「パレ・ロワイヤルの劇場」と記された場合、どの劇場建築物を指すのか留意を要す。同様に「オペラ座」や「コメディ・フランセーズ」(の劇団)は多くの劇場建築物を移動しており、そうした劇団に伴い劇場建築物の名称も変わるため、劇場名と劇場建築物の対応には要注意である。本論では特記なき場合、年代に関係なく一劇場建築につき一名称とする。see, supra note 4.
- 11) 1641年1月14日 RichelieuのMirameで開場。CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p. 55. この劇場の様子は, *Représentation théâtrale au Palais Cardinal avec Louis XIII, Anne d'Autriche et Richelieu*, Anon., s.d., 440x535, Musée des Arts Décoratifs, Inv. 18344 に描かれている。フランスで初めてのイタリア式プロセニウム・アーチを有する

- 劇場であった。CARLSON, Marvin, *Places for performance. The semiotics of theatre architecture*, New York, 1989, pp. 47-48.
- 12) モリエールがそれまで公演していたブティ・ブルボン宮の劇場がルーヴル宮の改築に伴い取り壊された。そこでモリエール座は枢機卿宮劇場に拠点を移し公共劇場として大衆に開いた。DEVAUX, Patrick, *La Comédie-Française*, Paris, 1993, pp.8-9 (邦訳, 伊藤洋訳『コメディ=フランセーズ』, 白水社, 1995).
- 13) 劇場の使いづらさから、この1763年の火災による崩壊まで、他の場所に劇場を建設するプロジェクトが数多く出された。HAUTECOEUR, Louis, *Histoire de l'Architecture classique en France*, Tome.III Paris, 1950, pp. 531-532.
- 14) 1763年4月6日午前11時頃火災発生。CHAMPIER, V., and SANDOZ, G., *op.cit.*, supra note 8, pp. 196-197. この様子は“Vue du Feu prit a la salle de l'Opéra de Paris le 6 avril 1763. planche n 125”, Anon., 292x420, M.C., Topo. PC 32 C. や “Incendie de l'Opéra, le 6 avril 1763”, Anon., B.N.Est., Va 231e. に描かれている。
- 15) 1750年からコンタン・ディヴリ(CONTANT D'IVRY, Pierre, 1698-1777)は宮殿東翼の著名な階段を設計し、カルト(CARTAUD, Jean Sylvain, 1675-1758)と共にフォンテーヌ中庭に面した部分の改修を主導した。またピエール=ルイ・モロー(infra., note 16)は、1753年に、パレ・ロワイヤル前の広場の整備と、広場に面した宮殿ファサードの改修を手掛けた。cf., CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, pp. 189-194.
- 16) MOREAU, Pierre-Louis, 1727-1794. この建築家はむしろモロー=デブルー(MOREAU-DESPROUX)の名で知られている。デスカによると、この名は19世紀以降に同名の人物と区別するために用いられた名で、18世紀ではMOREAU-DESPROUXの記述はほとんど見当たらない。DESCAT, Sophie, “Pierre-Louis Moreau et la Seine”, in MOËL, Michel Le. et al., *op.cit.*, supra note 8, pp. 79-92. モローは18世紀後半パリの主任建築家(Maître des Bâtimens de la ville de Paris)を務めたように著名な建築家であったが、20世紀以降のモダンズムの端緒としてルドゥーやプレーが注目を浴びる一方で、この建築家はほとんど光が当てられていない。
- 17) 1770年1月26日RameauのZoroastreで開場。
- 18) Cat. exp., *op.cit.*, supra note 9, p. 128.
- 19) 1764年2月の開封勅令によってルイ14世はオペラ劇場を以前と同位置に建設することを命じている。この勅令は、パレ・ロワイヤル展のカタログでは、オルレアン公の圧力のもとにだされたものであったとしている。ibid., p. 127. またこの勅令に関してはcf., CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p.200. も参照のこと
- 20) 1781年6月8日午後8時頃火災発生、死傷者を出し全壊。Procès-verbal de l'incendie de l'Opéra dressé par Pierre Chinon, avocat au Parlement, A.N., O1, 84. (cit. in CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, pp. 228-229).
- 21) シャルトル公(Duc du Chartres)は、後にオルレアン公(Duc d'Orléans)、さらにその後フィリップ平等公(Filippe Egalité)となるが、フランス革命の最中1793年ギロチンで命を落とす。
- 22) フォンテーヌによると、劇場再建計画には多くの建築家がシャルトル公に呼ばれ、その中でルイが選ばれたという。PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8, p. 302. 他の建築家の計画案としては、ピエートル(Piètre, Henri)によるものがA.N.にある。Opéra du Palais-Royal. Ancienne Salle et projet de reconstruction, PIÈTRE, Henri, s.d., 3 fies., A.N., N III Seine 546 / 1-3. Projet du Palais Royal, PIÈTRE, Henri, s.d., A.N., N III Seine 547. しかしルイに並ぶ著名な建築家の計画案は見つからない。恐らく最初からルイが主導権を握っていたと思われる。
- 23) 一時的にオペラ座が公演できるようにと、ルノワール・ル・ロマン(LENOIR LE ROMAIN, Samson Nicolas)設計で、サンマルタン門(la porte Saint-Martin)のそばに主に木造で約三ヶ月で建設された劇場。建設当初からその強度に問題があるとされ、こけら落としを無料とし満員の観客をまねき、その成功とともに強度も確認されたという。PRUDENT, Henri, and GUADET, Paul, *Les Salles de spectacle construites par Victor Louis à Bordeaux, au Palais Royal et à la place Louvois*, Paris, 1903, p. 31.
- 24) ルイが手掛けた劇場は、Théâtre de Bordeaux (1780), Théâtre des Variétés amusantes (1790), Théâtre de Beaujolais (1784), Théâtre des Arts(1793, 1794年7月よりオペラ座となる), Cirque du Palais Royal (1788)。ルイの劇場については、PRUDENT, H., and GUADET, P., *op.cit.*, supra note 23., 参照。これらの中でも特にポルドーに建設した劇場は、18世紀末から19世紀を通して広くヨーロッパにおける劇場のモデルとされた。ポルドーの劇場は1780年竣工。当時バット(PATTE, Pierre)は近代の劇場で最も大きなものとした。“Le plus magnifique de tous les théâtres modernes”, PATTE, Pierre, *op.cit.*, supra note 8, p. 115. またこの劇場に関しては、ルイ自身も図版入りの本を出版している。LOUIS, Louis-Nicolas, (LOUIS, Victor), *Salle de spectacle de Bordeaux*, Paris, 1782.
- 25) ルイのパレ・ロワイヤルの再開発の設計段階の調査、および彼による開発の都市計画上の意図は、次稿において詳細に検討する。
- 26) ヴィクトル・ルイによって1781-1788年パレ・ロワイヤルの庭園内に建設された(図2内記号Q)。1799年火災によって崩壊。PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8, p. 306.
- 27) 劇場は1641年完成から1763年崩壊まで、何度も改修された。残された図面は、ほとんどリュリイが枢機卿宮劇場にオペラ座を設置して以降のものである。したがってここでの記述はオペラ座開場以後のものとする。分析の典拠は、Le plan général du Palais Royal”, LA BOISSIÈRE, 1679, 475x375, B.H.V.P., B 153. “Veüe du Palais-Royal”, LA BOISSIÈRE, 1679, M.C., Topo., 10GC D. “Le plan général du Palais Royal, D'ORBAY, 1692, 501x301, B.N.Est., Va231. および、ブロンデルによる図面 “Plan général du batimens (sic) du premier étage du Palais Royal”, “Elévation du Palais Royal du côté de l'entrée par la rue Saint-Honoré” and “Elévation coupe et profil des batimens (sic) du Palais Royal, pris dans les plans sur la ligne, D, E.”, in BLONDEL, J.-F., *L'Architecture française*, Paris, 1752-1756, 平面図 Livre V, n°. IX, 312x520, 立・断面図 Livre V, n°. IX, 238x534 (本稿に掲載, 図5)。フォンテーヌによる図面 “Plan général du Palais-Royal en 1679” and “Plan général du Palais-Royal en 1748”, PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8, pl. 33 and 34. (1678年の平面図を本稿に掲載, 図4. これは恐らくLA BOISSIÈRE, 1679. ibid., の図面に基づくものと思われる)また劇場のみの図面は “Série de plans et coupes de la salle d'Opéra incendiée en 1763”, Anon., s.d., 13 fies., 370x505, A.N., N III Seine 545 / 1-13 (本稿に掲載, 図6.)。周辺の様子は、著名な当時のパリの鳥瞰図, TURGOT, Michel Etienne, and BRETEZ, Louis, *Plan de Paris*, Paris, 1734-1739, 21 fies., を参照。
- 28) “Série de plans et coupes de la salle d'Opéra incendiée en 1763”, ibid., 13枚に含まれた内の1枚、長軸断面図より明らか。
- 29) 分析の典拠は、Plan général du Palais-Royal en 1780”, in PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8, pl. 35. 及び “Salle de l'Opéra. Plan au Rez de Chaussée du Parterre”, “Plan du Théâtre et des Premières Loges”, “Coupe sur la largeur et élévation de l'avant-scène de la nouvelle salle de l'opéra de Paris”, in DUMONT, G.-P.-M., *op.cit.*, supra note 8 (本稿に掲載, 図8.)。またモロー筆と思われる平面図 “Palais Royal, Plan général d'un projet pour la disposition du Palais-Royal et de la Salle de l'Opéra”, Anon.(MOREAU, P.-L.?), s.d., 565x380, B.H.V.P., B156 (本稿に掲載, 図7.)。立面図は “Elévation du Bâtiment de l'Opéra”, Anon., 392x372, M.C., Topo., GCX1 (本稿に掲載, 図9.)。周辺の様子は、当時のパリの地図, JAILLOT, J.-B., *Nouveau plan de la ville et faux-bourgs de Paris, relativement aux Recherches critiques, historiques, et topographiques sur cette ville*, Paris, 1778. を参照。
- 30) CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p. 229.
- 31) モローによって構想されたパリの美化計画は18世紀の都市計画を代表するものとして注目に値する。cf., DESCAT, S., *op.cit.*, supra note 16.
- 32) スフロ(SOUFFLOT, Jacques-Germain, 1713-1780)によって1756年完成、1828年火災により崩壊。
- 33) マルシャル(MARESCHAL Philippe)によって1754年に完成、1785年に火災のため崩壊。
- 34) オジェ(OGÈRE)とヴィルロワ(VIRLOYS)により1751年に完成、改修を重ねつつ現存する。上記の劇場を含めこれら三つの劇場は、デュモン(Deumont)の劇場図集に掲載されている。DUMONT, G.-P.-M., *op.cit.*, supra note 8.
- 35) Cat. exp., *op.cit.*, supra note 9. こうした計画案の中でも注目すべきはショモン(Chomont)のオペラ劇場計画である。以下の著書内に収録 “CHAUMONT, Chevalier de, Véritable construction d'un théâtre d'opéra, à l'usage de France, Paris, 1766 及び、同著者Véritable construction extérieure d'un théâtre d'opéra, à l'usage de France, Paris, 1767. 彼はオペラ座の再建築として、ルーヴル宮の方形宮前の広場に面して完全に独立し、正面にポルティコを有する劇場を計画している。
- 36) L'Odéon. ペイル(Peyre, Marie-Joseph, 1730-1785) とド・ヴァイイ(De Wailly, Charles, 1730-1798) によって1782年完成された劇場。オデオン座は、もとはコメディ・フランセーズの劇場であった(本論では、年代に関係なく「オデオン座」と記する)。この計画は、リュクサンブール宮に近接したコンデ宮の敷地を、劇場を中心として大規模に再開発するものであり、モローやルイも計画案を出している。この計画に関する詳細な研究は、STEINHAUSER, M., and RABREAU, D., *op.cit.*, supra note 6., pp. 8-50.
- 37) 筆者の調査より確認できたルイ又はルイの事務所による(と推定されるものも含む)劇場部分の図面は以下(ただし、パレ・ロワイヤル全体の再開発の図面はこの他にも幾つか残されている)。“Plan du premier étage du Théâtre par Victor Louis, Anon., s.d., B.N.Est., Va 231. “Salle de Spectacle, rue de Richelieu, plans des différents étages, Anon., s.d., 9 fies., 235x365, A.N., N III Seine 502. “Plan au rez-de-chaussée de l'opéra projeté sur une partie de terrain du Palais Royal”, “Plan du niveau des premières loges de l'opéra projeté sur une partie de terrain du Palais Royal”, Anon., s.d., 2 fies., 645x490, A.N., N III Seine 889 / 8-9. (本稿に掲載, 図11.) “Plan du Rez-de-Chaussée”, “Plan des Premières Loges au niveau des Appartements du palais”, Anon., s.d., 2 fies., 750x1090, and 660x625, A.N., N III Seine 1147 / 1-2. “Salle de spectacle, rue de Richelieu, plan et coupe longitudinale, LOUIS,

- Victor, s.d., 2 files., plan: 545x750, coupe: 282x240, A.N., Z1j 1281. (本稿に掲載、図10。)元オペラ座の劇場として計画されていたので、図面上にはオペラ座と記されていることがある。以上の図面以外に、フォンテーヌの図面、*“Plan général du Palais-Royal en 1784”*, in PERCIER, Ch. and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8, pl. 37. またドネによる図面は*“Théâtre Français”* (élévation, coupe, plan au rez-de-chaussée, plan aux 1^{res} loges, vue intérieure de la salle), in DONNET, A., *op.cit.*, supra note 8, pl. 9., 20世紀初めの復元図は(各階平面図と断面図) *“Théâtre Français”*, in PRUDENT, H., and GUADET, P., *op.cit.*, supra note 23. この当時のパリの地図はVERNIQUET, Edme, *Plan de la ville de Paris avec sa nouvelle enceinte levé géométriquement sur la méridienne de l'Observatoire*, 1791年制作, Paris, 1796, 73 files., 460 x 680, が正確かつ重要である。
- 38) ラディチョとドリャ・サジュスはこの劇場を巡る回廊について次のように述べている。「一階のプランは、商業を目的としたアーケードと(...)パッサージュによって如何に劇場がバレ・ロワイヤルに統合されているかを示していると同時に、(...)通りに面したガルティコとともに劇場が都市との関係を重視していることも示している」RADICCHIO, Giuseppe, and D'ORIA SAJOUS, Michèle, *Les théâtres de Paris pendant la révolution*, Paris, 1989, pp. 74-77.
- 39) 当時の劇場の外観を分類したラブローの論文によると、逆キール状屋根は劇場の外観の特徴を示す一要素であることを示している。そしてルイの劇場が当要素の端緒とされ、19世紀の劇場建築に頻繁に引用された。RABREAU, Daniel, "La fisionomia dei teatri francesi: città e teatro nel XVIII^e-XIX^e secolo", *Lotus international*, No.43, Milan, 1984, pp. 48-63, p. 62. またコメディ・フランセーズ劇場の屋根においてルイはそれまでの木造の小屋組みに代えて鉄を初めて利用したことでも先駆的であり、後まで大きな影絵を与えた。PRUDENT, H., and GUADET, P., *op.cit.*, supra note 23.
- 40) 19世紀初頭にパリの劇場建築の一瞥を著したドネは、フランスの誇るべきコメディ・フランセーズの、この劇場が広場に面して建設されていない点を強く批判している。DONNET, A., *op.cit.*, supra note 8, pp. 120-121.
- 41) フランス革命の間に著しく破損した劇場の最初の大きな改修は、1798年のジャン・モロー(MOREAU, Jean Charles Alexandre)によるものである。よってルイ以降とは1798年以降とする。cf., DEVAUX, P., *op.cit.*, supra note 12, p. 53.
- 42) FONTAINE, Pierre-François-Léonard (1762-1853), ペルシエ(PERCIER, Charles, 1764-1838) と共同してほとんどの設計活動を行い、19世紀初頭フランスで最も影響力のあった建築家であった。cf. supra, note 8, and infra, note 43.
- 43) PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8. フォンテーヌはこの本以前、1829年に、FONTAINE, P.F.L., *Le Palais-Royal*, Paris, 1829, という小さな本を著している。その文章は、ほぼ同内容で1833年出版の、*Plans de plusieurs... (op.cit., supra note 8)*, に載せられ、さらに1833年のテキストは、1834年の *Histoire du Palais-Royal*, Paris, 1834, と1837年の *le Palais Royal, domaine de la couronne*, Paris, 1837, に再掲載された。最後2冊はフォンテーヌのバレ・ロワイヤル再開発に関する研究に不可欠。
- 44) Place de l'Opéra. ここでいうオペラ座はガルニエ(GARNIER, Charles, 1825-1898)によって1875年完成した現オペラ・ガルニエを指す。
- 45) CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p. 386.
- 46) TUDWORTH, Simon, *Theatres - An Architectural and Cultural History*, London, 1973, (邦訳、白川宣力、石川敏男訳、『劇場—建築・文化史』、早稲田大学出版部、1986)・PEVSNER, Nikolaus, *A History of Building Types*, London, 1976.
- 47) ルイが建設した劇場は、必ずしも積極的な施設の独立化を示すものではなかった。このことは、同時期、コンデ宮の敷地に建設されたオデオン座が積極的に独立するよう建てられたことと比較すれば、明らかである。独立した施設としての都市劇場の誕生という観点からすれば、オデオン座のほうがより典型であった。むしろバレ・ロワイヤルにおいては、既存の宮殿の改修に伴って劇場も徐々に変化してきた。この特殊性ゆえに、その変遷に、宮殿内の劇場空間が都市空間に独立して建設される過程に段階的な変化をみることができるのである。

- 48) この点に関しては、本稿23. ヴィクトル・ルイによるコメディ・フランセーズ劇場(1791-1792)で述べたように、周囲に巡らされた回廊の二重の意味—すなわち、劇場は回廊によって庭園の施設に一体化されている点と、回廊によって独立し、都市に向かって開かれている点—が大きく作用している。see, supra note 38.
- 49) ルドゥー(LEDoux, Claude-Nicolas., 1736-1806)によって1784年に完成された劇場。1958年火災により崩壊。現在内部は完全に作り替えられ外観のみルドゥー設計のオリジナルの様子を残す。
- 50) DUMONT, G.-P.-M., *op.cit.*, supra note 8. CHAUMONT, Ch. de, *op.cit.*, supra note 35, PATTE, P., *op.cit.*, supra note 8.

図版出典

- 図1 JAILLOT, J.-B., *op.cit.*, supra note 29. の地図を参考に筆者作図。
- 図2 VERNIQUET, Edme, *op.cit.*, supra note 37. の地図を参考に筆者作図。
- 図3 “Plan général du quartier du Palais Royal avec les changements relatifs à la construction de la nouvelle salle de spectacle” 1912. (Extrait commission du Vieux Paris, 1912, Procès verbaux No.3, 1912). B.H.V.P., B 152. 及び、CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p. 415に掲載の地図を参考に筆者作図。
- 図4 “Plan général du Palais-Royal en 1679”, PERCIER, Ch. and FONTAINE, P.-F.-L., *op.cit.*, supra note 8 and note 27.
- 図5 “Plan général du batimens (sic) du premier étage du Palais Royal”, “Elévation du Palais Royal du côté de l'entrée par la rue Saint-Honoré”, in, BLONDEL, F., *op.cit.*, supra note 27.
- 図6 Plans du théâtre de l'Opéra (incendiée en 1763) in, *Série de plans et coupes de la salle d'Opéra incendiée en 1763*, *op.cit.*, supra note 27. 13枚の内の2枚。
- 図7 “Palais Royal, Plan général d'un projet pour la disposition du Palais-Royal et de la Salle de l'Opéra” Anon. (MOREAU, P.-L.?), *op.cit.*, supra note 29.
- 図8 “Salle de l'Opéra. Plan au Rez de Chaussée du Parterre”, “Plan du Théâtre et des Premières Loges”, in DUMONT, G.-P.-M., *op.cit.*, supra note 8, and note 29.
- 図9 “Elévation du Bâtiment de l'Opéra”, Anon., *op.cit.*, supra note 29.
- 図10 Salle de spectacle, rue de Richelieu, plan et coupe longitudinale, LOUIS, V., *op.cit.*, supra note 37. 二枚の図面の内の一枚(平面図)。劇場の部分のみ二階部分平面の描かれた小紙片が劇場一階部分に重ねて添付されている。
- 図11 “Plan au rez-de-chaussée de l'opéra sur une partie de terrain du Palais Royal”, and “Plan au niveau des premières loges de l'opéra sur une partie de terrain du Palais Royal”, Anon., *op.cit.*, supra note 37.
- 図12 Vue du théâtre de Victor Louis, MEUNIER, s.d. (18世紀末頃), B.C.F.
- 図13 “Plan du Palais Royal. Rez-de-Chaussée. 1833.”, in, FONTAINE, P.-F.-L., 1834, *op.cit.*, supra note 43., pl. 57.
- 図14 “Reunion et achèvement des Tuileries, du Louvre et de Palais Royal par Charles Percier et P.F.L. Fontaine, 1831”, in, PERCIER, Ch., and FONTAINE, P.-F.-L., 1833, *op.cit.*, supra note 8 and note 43.
- 図15 シャブロールによる増築以降のコメディ・フランセーズ劇場、CHAMPIER, V., and SANDOZ, G.-R., *op.cit.*, supra note 8, p. 372に掲載の写真。

(1998年4月3日原稿受理, 1999年3月26日採用決定)